派遣報告書

氏名　　中村隆之（総合国際学研究院リサーチ・フェロー）
派遣先　フランス社会科学高等研究院（EHESS）
派遣期間　2010 年 8 月 1 日〜2010 年 11 月 24 日
　　2010 年 12 月 2 日〜2011 年 6 月 9 日

派遣概要および成果

報告者は、上記期間中フランス社会科学高等研究院に客員研究員として所属し、研究課題「フランスにおけるカリブ海文学の展開　1930 年代—1980 年代」に取り組んできた。フランスの旧植民地にして現海外県であるマルティニック島、グアドループ島、ギュイヤンヌ（仏領ギアナ）出身の作家の作品読解を通じてカリブ海出身作家のフランス語表現文学の展開を跡付けることを目的とした。資料収集とその読解を基本とし、文学の史的展開を辿る関係からテキストとコンテキストを相関させた読解を目指した。

収集した資料は三種類に大別できる。第一に、1930 年代から 1980 年代に発表された文学作品（詩集、小説、戯曲）、第二に、文学史および作家研究の専門書、第三にカリブ海フランス海外県の現代史を扱った政治・経済・歴史関係の研究書である。収集資料は多数にのぼるためここで紹介することはできないが、一部をあげれば、ギー・レヴィ・マノ社から出版されたレオン=ゴントラン・ダマスの第一詩集『色素』(1937 年)、エメ・セゼールの代表的詩集『帰郷ノート』のボルダス社版（1947 年）およびK出版の『太陽、切られた首』（1948 年）、エドゥアール・グリッサンの初期詩集『不安な大地』（1955 年）など、当該分野で貴重な資料をこの機会に収集することができた。

資料収集のほかには現地の研究調査として、作家が留学時代に住んでいたアパルトマンをはじめとするカリブ海出身作家にゆかりある場所の訪問、2010 年 5 月末から 6 月上旬にかけてエクサンプロヴァンスで開催されたフランス語圏研究国際会議への出席など関係する各種催しへの参加を積極的に行い、研究上の交流と見聞を広めた（詳細は月次報告書を参照されたい)。

派遣期間中、幾つかの文章の出版（日本国内）とともに口頭発表の機会を得た。すべてを列挙すると煩雑になるため、ここでは本研究に直接関わる出版物を二点記すことにする。

１）土屋勝彦編『反響する文学』（風媒社、2011 年）。「グリッサン、フォークナー、サン=ジョン・ペルス――ポストプランテーション文学論の試み」（60-89 頁）を分担執筆。

２）小倉充夫・駒井洋共編『ブラック・ディアスポラ』（明石書店、2011 年）。第 2 部第 2 章「ネグリチュード、民族主義、汎カリブ海性――フランス語圏カリブ海地域のディアスポラ知識人群像（1930 年代ー1970 年代）」（181-193 頁）を分担執筆。

１では特にサン=ジョン・ペルスをめぐる項の執筆に本研究が関わっており、2 は本研究のエッセンスを凝縮したものであると言える。1 および 2 とも本派遣プログラムによる助成であることを文中に明記した。

今後の課題

本研究は、短期派遣 EUROPA の支援を引き続き受けて行われる 2011 年度の研究課題「フランスにおける文学と植民地主義　カリブ海フランス語作家研究 1930 年代—1980 年代」に発展的に継続される。文学と植民地主義との関係に焦点を当て、これまでに収集した資料の読解を深めるとともに、引き続き資料収集を行うつもりである。本研究に最も関わる成果である、2011 年度中に出版予定の『フランス語圏カリブ海文学小史』（風響社刊行予定）をはじめとして、短期派遣 EUROPA の支援を受けた成果を今後も積極的に公表するつもりである。